

救急車 初体験

野瀬 隆平

「ピーポー・ピーポー」、あの救急車のサイレンが聞こえる。しかし、いつもと音が少々違う。近づいたり遠ざかったりせず一定の大きさである。そうだ、自分がその救急車に乗っているのだ。

妻が買い物に行くと家を出て十分ほど経ただろうか、電話が鳴った。出て見ると妻からだ。「私ころんで、今救急車の中なの」という。エエ！

電話は救急隊員に変わった。大通りのどこそこに停まっているという。あわてて妻の健康保険証を捜しだし、家を飛び出して救急車へと急ぐ。幸い妻は大きな怪我ではないようだ。転んだ拍子に左肘をしたたか打って、どうも脱臼・骨折しているらしい。

救急隊員は、受け入れてくれる病院を捜して何軒かの病院に電話をしているが、見つからない様子。たまたま、妻がかかったことのある整形外科の病院があるのを思い出し診察券も持っていたので、電話をすると救急患者を受け入れてくれるとのこと。

そこで、自分も同乗したまま、「ピーポー」と走り出したのだ。自宅のすぐ近くを通り過ぎて行くのは、少し変な感覚だ。

救急車のサイレンの音も、よく聴いていると二種類あるのに気が付いた。通常走っているときと、前の車を追い越したり赤信号をあえて無視して進むときなどは、一段と音が高くなりテンポも速くなるようだ。そんなことに関心が向いたのも、妻が生死に係わるような危険な状態ではなかったからである。車は十五分ほど走って病院にたどり着いた。

受け入れに当たっては、何枚もの書類に記入させられた。本人に代わって、病歴、服用中の薬など詳しい個人情報を書きこむ。待つことしばし、診察室に招かれ一緒に入る。

レントゲンと  撮影の検査の結果、やはり肘の脱臼と骨折と診断された。肘の固定には、石膏で固めるギブスではなく、「シーネ」という着脱が可能なものを包帯で巻く処置がとられた。

その様子を見ていて、自分も中学生の時に同じく左肘を骨折してギブスをはめたことを思い出していた。